『地方病を語り継ごう』

編：昭和町風土伝承館 杉浦醫院（昭和町教育委員会、2022 年）

『清浄島』

著：河﨑秋子（双葉社、2022 年）

浅川 満彦

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野 医動物学ユニット

パンデミックなCOVID-19の収束の見込みがない今年、エンデミックな寄生虫病、すなわち日本住血吸虫症と多包虫症に関する著作が相次いで刊行された。『地方病を語り継ごう』と『清浄島』である。前著本文は3つの章で構成され、最初の2つが日本住血吸虫症に罹患した方々やその親族・知人による体験記および医師・研究者による寄稿文で構成されている。第3章は同症や杉浦（父子）医師の年表などの資料が編まれていた。

本誌をご覧になられる方の中には獣医寄生虫（病）学を講じておられるものと推察される。そして、既に日本では問題視されなくなった日本住血吸虫（症）を教育する難しさはご理解頂けるであろう。この吸虫は一般的な吸虫類としては例外の塊なので、共用試験や国家試験に問われ易いなどという「殺し文句」で囲い込むのは、何となくフェアではない気がするし・・・。卑近なことで申し訳ないが、私（紹介者）は、山梨生まれであるので、前著で語られた「地方病」に関する小学生時の体験記（特に、1950年に代生まれた体験者による）はほぼ全てを共有できた。ところが、そのような者ですら、眼前の学生たちに伝えることが難しいのである。そのようなことから、リアルな言葉は底知れぬ力があることを感じた。もちろん、猖獗を極めた時代に生きてこられた先達の証言は迫力があり、是非とも、学生諸君に紹介をしたいと思う。

なお、この本は2022年10月、甲府市で開催された第81回日本公衆衛生学会総会の展示ブースで販売されていたものを、「かながわ保全医学研究会」の小池 剛事務局長が私に送って頂いたものである。小池先生はその総会後、本書編者となった「昭和町風土伝承館」を訪問され、そちらで紹介された『中学生が伝える 恐ろしいやまい・地方病』（菊池花音ほか 文絵、南アルプス子どもの村中学校 ゆきほたる荘、2022年4月刊）も入手され、あわせ贈呈頂いた。こちらは魅力的な絵や貴重な写真満載の方が、あまり読書をしない大学生には好適かもしれない。これら貴重な書籍をお送り下さった小池先生には深謝したい。

『清浄島』は、昭和29年（1955年）からの北海道立衛生研究所による礼文島における多包虫症対策を基にした創作である。こちらも個人的なことで恐縮するが、主人公のモデルとなった方には、生前、同研究所にお邪魔した際、激励のお言葉を何度も頂いたので懐かしく述懐しつつ、その際は未知であった若き日の姿を想像した。本書は序・終章を含め13の章構成からなる力作で、最後に、2021年の国立感染症研究所による知多半島の多包条虫定着に関しての見解が示された「おわりに」が附記された構成であった。こちらの寄生虫は、日本住血吸虫とは異なり、現在進行形的に問題視される病原体であり、形而上的な事象を教える難しさはないものの、やはり道外の学生たちの受け止め方はどうであろうか。だが、幸い、そういった方々の多くが北海道という場や動物などに憧憬の念を抱いていると思う（願う）。だとすれば、本書の筆致には間違いなく惹きつけられるはずだ。もし、これで火がついたのなら、こちらの作品の作家による『肉弾』（角川文庫，2020年6月刊）も紹介して欲しい。こちらの作品にも多包虫（症）の紹介もあるし、なんと、シカのシラミバエについての言及もあるので、まず、本研究会の皆様にご確認頂きたい。